

研修名 支援を必要とする子どもの保育

平成29年 10月19日(木) 13:30~16:00

講演 「発達障害の理解と発達を支える環境設定」

講師 京都文教短期大学 張 貞京 氏

1 講演要旨

- 1) 発達障害と環境設定および改善の必要性
発達障害児は先進国に多い。なぜか? いろんな事が普及するとともにしたらいけないが増えたから。
保護者にはこの環境はつらくて生きにくくしていることを伝えていくことが大事。
- 2) 発達障害の理解①
脳機能障害+環境要因(適応障害)→世の中の経験良いものにする事。
保育所の主たる課題であり最後の砦である。
- 3) 発達障害の理解②
発達性協調運動障害→不器用、姿勢の崩れ、箸もてない、もの忘れ
境界線級知的障害→理解ぎりぎり難しい子くり返しやればできる
いずれも脳機能障害を合併している子ども多く1割をこえている。
遺伝的要素強い。子どもと親、似ている。
環境によりスイッチ入らないようにし大人が経験させる工夫すること。
- 4) 自閉症スペクトラム障害の原因
脳の働きほぼ全域に問題が生じていると理解する
大脳辺縁系→本人眠いこと気づきにくいなどの渴き気づかない⇒機嫌悪い
作業記憶スケジュール管理→これしたら次はこれといった見通し弱い。
ミラーニューロン障がい→相手の動作模倣バイバイ→手の甲でする
情動の調節→ドーパミン系神経→やる気の問題、やる気でない
気分のむらがある→神経質の障がい月→ポーとするなど
アスペルガー脳→定型発達の人と逆の場所が反応する
人の顔の表情を見るのではなく物を見ている表情より物に好奇心を持つ
⇒人の表情から気持ち感じにくい。
相手の心自分の心感じているがどう導きだせばいいか?
自閉症=言葉で判断する。アスペルガー=非言語的要素に反応する
- 5) 愛着障害との関係
発達障害と区別つきにくい。大人にまわりつくだっこせがんでもおきている。
親の愛情のかけ方が間違えている⇒支配する関係いきすぎる関係。思春期うまくつきあっていけない。大人とコミュニケーションとれない。
発達障害があつて愛着障害ひきおこす⇒かわいくない
愛着障害のみでおこす⇒脳の働き動かなくなる⇒発達障害のような状態をひきおこす
大人との安心できる環境を改善することが大切。
- 6) 環境設定の留意点
- 今の環境を見直す→その子にあった環境を作り出す⇒空間的見直しをする。
準備物が目に入らない方法。話を聞く場所どのようにスペースを使うか。
ロッカーでしきる
展示物多すぎる→落ち着かない。保育の流れ→変更が沢山生じないように見直す。
保育は一つのことじっくりと。沢山すればいいという事ではない。
伝達は明確か。完結に話す
例1 大人の話聞いてない→二つ以上意識すること苦手→分かるように伝える
例2 乱暴な動きが続く子ども→こどもの気持ちの理由を考えること
例3 発達に差がある子どもたちの保育→3歳後半療育教室通う子ども
⇒友達のカプラつぶす
不安定に高く積み上げる→ADHD⇒ハラハラドキドキが難しい見るのが辛い
⇒壊す
安定して積む⇒安定してやりだす→自分ができない悩み気づいてあげる。